Osaka University Knowledge Archive

Title	医療という場における自己愛の問題に関する臨床心理学的研究 : 急性期医療から外来化学療法、そして緩和医療をフィールドとして
Author(s)	成田, 慶一
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33998
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　医療という場における自己愛の問題に関する臨床心理学的研究
― 急性期医療から外来化学療法、そして緩和医療をフィールドとして ―　〕

学位申請者　　成田　慶一

ナルシシズムという概念はおよそ100年前にFreud, S.によって精神的力動やそれに伴う現象を論じるために、精神分析学の中に導入されたものである。その後、様々な研究の展開によって、個人の発達・成熟過程として、あるいはパーソナリティとして、さらには文化・社会的な集合的事象と関連するものとしてこの概念は用いられてきた。そのため、いささか多義的になりすぎた感も否めないが、それでもなおナルシシズムおよび自己愛という概念はその存在感を失うことなく、現在も人間のこころを論じるための視座として価値を持ち続けている。

筆者は医療をフィールドとして対人援助や心理療法を行う臨床心理士であるので、病という基本的に本人の予期なく突然襲いかかる暴力的な体験が機能的喪失や社会的役割の喪失を伴って、個人の自己愛の傷つきを引き起こす事態に幾度となく遭遇してきた。そのため日常的な臨床業務において、必然的に自己愛についての心理学的（基礎研究的）理解と臨床的（実践理論的）理解は、私（筆者）という存在を通じて絶えず試行錯誤に晒され、常に書き換えられながら生き残らねばならなかったのである。本論文はこの過程で得られた視座を端緒として、医療という場における自己愛の問題についていくつかの異なる角度から論じたものである。

第Ⅰ章では、ナルシシズムおよび自己愛をめぐる先行研究を概観し、自己愛という訳語の問題を含め、これらを論じる上での重要な論点を整理した。特にここでは、Freudの論じた「リビドーの自己への撤収」、Kohutの論じた「自己の構造の安定と自己評価の維持のために必要な自己対象関係」、ユング派であるJacobyの論じた「知恵とユーモア、恥の閾値が柔軟になることと自我理想との間の緊張感の緩和」、Stoneの論じた「中庸の権利意識と審美観」、Nozicの論じた「公正さfairness」に注目している。また、臨床的・文化的観点としてGabbardを筆頭に多くの臨床家が提唱する「顕在・誇大型」と「潜在・過敏型」のナルシシズムについて、診断基準の項目の歴史的変遷を含めて整理した。さらには、実証的心理学研究としての投映法と心理尺度を用いた研究の方法論的展開、神経科学領域におけるfMRIを用いた研究動向などを確認している。

第Ⅱ章では、質問紙法による3つの実証的研究を通じて、どのような構造やメカニズムでナルシシズムは存在（成立）し、建設的／不適応的に機能するのかを論じた。研究1では、大学生を対象とした自己愛人格目録（NPI）における2000年と2012年の平均構造分析を行った。その結果、自己主張性（$p<.01$、$d=-.35$）と優越感・有能感（$p<.05$、$d=-.20$）の因子平均推定値に有意差が見られた。つまり、注目・賞賛欲求という他者希求的で過敏型と関連が強い欲求は時代的な変化が見られないものの、誇大型と関連する野心的で理想を追い求めるスタイルは時代と共に衰退して（抑制されて）いったことが明らかとなった。このような時代変化には、学習要領の改訂などその時代に求められる人間観の変化との関連が考えられた。研究2では、誇大型を中心としたNPI短縮版と過敏型を中心とした自己愛的脆弱性尺度（NVS）との構造的関係を検討した。クラスター分析によって「誇大型ナルシシズム群」「過敏型ナルシシズム群」「非ナルシシズム群」「混在型ナルシシズム群」の4類型を選別し、各群のパラメーターのバランスの違いを散布図における重心の違いという形で視覚化した。研究3では、筆者らが翻訳したAffective Neuroscience Personality Scale日本語版（ANPS-Js）とNPIを用いた構造方程式モデリングによって、ナルシシズムの生物学的神経基盤を論じることの展開可能性について検討した。もっとも注目すべき結果は、ドーパミン報酬系回路であるSEEKINGシステムとナルシシズムの関連が支持され、促進系と抑制系の2種類のパスが想定されたことである。統計学的に採用されたこのモデルは「自我は自我理想の影響を上から来るものとして、ナルシシズム的自己の影響を下から来るものとして経験する」というKohut（1966）の言説や、Panksepp（2011）のNested Brain Hierarchiesモデルと驚くべき符合を示すものであった。さらに、その他の基本情動との関連からもナルシシズムの各因子や成分が建設的／不適応的に機能する構造が示された。

しかしながら、これらはあくまで「もの」として取り出された、いわば静的な名詞の相におけるナルシシズムを考察したものでしかない。本来のナルシシズムや自己愛という治療的対人関係の中で表現される特徴的現象を論じるにあたっては、「こと」としての動詞の相についてこそ考察する必要があると考えられた。

そこで第Ⅲ章では、抗がん治療としての外来化学療法に関するインフォームド・コンセント（IC）という医療場面において、どのように自己愛の問題が現象するのかを論じた。この一連の研究は、近年関心の高まっているMixed Methodsという方法論に依拠して、自己愛という臨床心理学的な観点を導入するための手続きを慎重に進めている点に特徴がある。第1節では量的アプローチ（質問紙研究）によって、ナルシシズム特性が医療に対する動機づけや価値観と関連し、またIC評価にも影響することが示唆された。第2節では、観察研究によって得られた観察記録と精緻な逐語記録から、質的アプローチに基づいて各事例の展開を示すための「起承転結フレームワーク」を提示した。第3節では、これらの異なるアプローチから得られた視点と知見の統合的な解釈に基づいて、ICという医療場面においてはどのように自己愛の問題が現象するのかについて誇大型のエピソード・過敏型のエピソード・成熟志向性をもつエピソードの3つの類型にまとめて示し、それらへの医師の対応の在り方について事例ごとに検討した。

IC面接の場におけるがん患者の言動からは過敏型のエピソードが多く集まる中で、誇大的なエピソードも少ないながら見出された。指導医の立場にもある臨床歴15年以上の専門医2名は、非常に丁寧な姿勢で患者の話を聴くこと、そして実際的な医学的データと治療上必要な注意を伝えることを通じて、誇大型・過敏型いずれの自己愛の問題に対しても当意即妙で応じていた。しかし、自己愛的な深い傷つきが患者の対処行動で覆い隠されている場合、医師の注意が情報を正しく解釈させるといった現実的な問題焦点型の対応に終始してしまい、自己愛の問題は取り上げられないまま、医師患者関係が好ましい方向では構築されなかった事例も見られた。このように、IC面接などにおける医師患者関係の構築がスムーズにいかないときには特に、自己愛の問題の現象という視点は現場還元的な示唆につながる可能性があることが示唆された。

続く第Ⅳ章では、筆者自身の臨床事例を通じて、前章とは異なる視座から、自己愛の問題についての理解がどのように心理援助の場での実践に応用されるのかを論じた。この臨床心理学的事例研究には、セラピスト（実践者）という役割を担ったものが、クライアント（患者）との二者関係において当事者ともなり、そのプロセスを研究者として事後的に再構成するという3つの役割や視座が渾然一体となって生み出されるという方法論上の独自性がある。

本章で示された6つの事例は、医学的治療期は急性期から終末期までと多岐に渡り、また医学的主病名もメニエール症候群、頸部外傷、脳梗塞、悪性腫瘍と多岐に渡るため、当初の援助目的、援助方法（治療構造、介入技法）には当然のように大きな違いがあり、そこで用いられている心理療法の技法もそれぞれ異なる。さらに一つ一つの事例を共有するために適切な形式や文体を選択しているため、各事例の提示方法に一貫性はなく、個別の物語として提示されている。しかしながらこれらの事例すべてには、セラピストとして一人一人のクライアントの生きてきた世界観に浸り、その場に感じられる生きにくさを共有するという臨床的な営みには「自己愛の成熟」に関する視座が通底していることに気が付かされる。

いくつかの病は、個人にとって何らかの予期を与えることなく当人に突然降りかかる暴力的なイベントである。そのため、適切な加療が行われたとしても、これまでとは違う身体感覚、時空間感覚が意識されるため、命に係わるイベントであるという感覚が生じていればなおのこと、より根源的なテーマが掘り起こされて、心理援助の場に持ち込まれることがある。それは、あたかも「大規模な天災によって、それまで覆い隠されていた様々な問題が地割れの隙間から流れ出るかのようである」（成田、2009）。医療者が「疾病disease」（Young, 1982）の治療に当たろうとすると、患者の心理社会的背景を含めた主観的問題との齟齬が、実際の医療者との関係や症状に影響してくることは臨床に従事する者の共通認識である。本章の累積的事例研究から包括的に言えることは、このような、個人と世界の関係が大きく揺さぶられるときこそ、そしてそのようなときに多くが訪れることになる医療という場でこそ、自己愛という人間の生にとって中核的な、かつ全体性と結びついている概念が活きてくるということであろう。

以上、本論文の第Ⅰ章から第Ⅳ章までを通じて、医療という場における自己愛の問題について論じた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　成田慶一　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	教授	老松克博
	副 査	教授	井村　修
	副 査	准教授	権藤恭之

論文審査の結果の要旨

本論文は、自分を価値あるたいせつな存在と思えることを意味する「自己愛」と、その偏りや障害を意味する「ナルシシズム」の多様な現象形態を、おもに医療をフィールドとして量的研究と質的研究の両面から捉えたもので、その心理学的特性、生物学的基盤とのつながり、臨床的関係性への影響、生の質の深化と向上への活用などを総合的に論じている。

本論文は４つの章から構成されている。第Ⅰ章では、ナルシシズムおよび自己愛をめぐるFreud以来の先行研究を概観するとともに、臨床的・文化的観点としてGabbardらが提唱する「顕在・誇大型」と「潜在・過敏型」のナルシシズムの意義、診断基準の歴史的変遷なども含めて、本論文における重要な論点を整理している。

第Ⅱ章では、質問紙法による3つの実証的研究を通じて、ナルシシズムの構造と機能を論じている。研究１では、自己愛が高まるとされる大学生を対象に、自己愛人格目録（NPI）における2000年と2012年の平均構造分析が行われた。その結果、自己主張性と優越感・有能感の因子平均推定値に有意差が見出され、誇大型と関連する野心的で理想を追い求めるスタイルが時代とともに衰退したことが明らかになった。研究２では、誇大型尺度と過敏型尺度との構造的関係を検討し、クラスター分析による４類型が散布図における重心の違いとして視覚化されている。研究３では、学位申請者らが翻訳したAffective Neuroscience Personality Scale日本語版とNPIを用いた構造方程式モデリングで、ドーパミン報酬系回路であるSEEKINGシステム（Panksepp）とナルシシズムに促進系と抑制系の2種類のパスが想定されたことをもとに、ナルシシズムの生物学的神経基盤について議論を進めうる可能性が示唆された。

第Ⅲ章では、がん医療におけるインフォームド・コンセント（IC）の観察研究から、患者の自己愛の問題がどのように現象するのかを論じている。まずは量的アプローチによって、ナルシシズムが医療に対する動機づけや価値観と関連し、IC評価にも影響することが明らかにされ、次の質的アプローチでは、IC各事例の展開が「起承転結フレームワーク」により提示された。さらに、統合的な解釈にもとづいて抽出された、誇大型エピソード・過敏型エピソード・成熟志向的エピソードという３つの類型を事例ごとに検討し、自己愛の問題という視点が有効性の高い現場還元的な示唆につながることが示された。

第Ⅳ章は、学位申請者自身の臨床実践に基づく累積的事例研究である。本章に示された６つの事例から、セラピストとしての営みの実際には「自己愛の成熟」に関する視座が欠かせないものであることが示された。

以上の研究から包括的に言えるのは、個人の存在そのものの意味が大きく揺るがされ、世界との関係の見直しを性急に迫られるときにこそ、そしてそのようなただならぬ状況で多くの人が訪れることを余儀なくされる医療という場でこそ、自己愛という人間の生にとって中核的な、かつ全体性と結びついている概念が活きてくるということである。本論文では、このことが広角で複合的な方法論と切り口を通してきわめて説得的に示されている。

このように本論文は、近年、臨床実践的研究から実証的研究へと急速に関心の裾野が広がりつつある自己愛の問題に革新的な位置づけを与えた労作であるとともに、神経科学的領域との架橋にも努めた画期的な試みと言える。

以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。